

大乘仏教の起源に関する諸問題

佐々木 閑

本日は、お招きいただき、心から感謝申し上げます。そのうえ、今日の話を『仏教学セミナー』にも載せていただけるということで、これは大変、光栄なことでもあります。といいますのは、私は変な趣味がありまして、大学の図書館に潜り込んで、昔の学術誌を創刊号からゆつくりと読むというのが楽しみなのでありますが、そういう中でどういった雑誌が一番、私にとって思い出深いかといいますと、やはり、大谷大学が出ております例えば『大谷学報』とか『仏教学セミナー』ですね。こういった雑誌をゆつくりと読んでいきますと、この大谷大学の過去に蓄積された膨大な知の体系というものが少しずつ見えてくるのであります。そういう意味でも、他の大学とはケタ違いにこの大谷大学の仏教学の学問的な深みというものを感じています。その大谷大学が代表する『仏教学セミナー』に載せていただけるという話でしたが、聞き終わったら「やっぱり載せるのやめます」と言われるかもしれませんが、まあともかく、一生懸命、それに合わせたレベルに達するような話ができればと思っております。

それで今日は「大乘仏教の起源に関する諸問題」というタイトルでお話するのですが、私の本来の専門は仏教の戒律でありますから、大乘仏教とは直接関係しない分野から仏教の学問を始めました。しかし皆さん御存知の通り、戒律を勉強して、そして大乘仏教の起源へと進んだ大先達がおられるわけで、かの平川彰先生ですね。この平川先生の

足跡が示しているように、戒律をベースにしてインド仏教を調べていくと、自ずから問題意識が大乗仏教へ行くんですね。それは何故かといいますと、それまでの、いわゆる原始仏教とか部派仏教などと呼ばれる古い時代の仏教の後で、大乗仏教という新しいものが出てきたということは、なんらかの違った形の、違ったスタイルの仏教が出てきたわけですから、それはどこが違うんだろうということに好奇心が湧くのは当然のことです。そういう時に、思想や哲学の違いはお経を読めばわかりますが、それとは別に、お坊さんはどういう生活に変わったのか、釈迦時代の仏教と大乗仏教では、お坊さんの生活にはどのような違いがあったのか、という具体的な疑問が必ず起こってくるわけです。そしてその問題に答えるためには、否が応でも、戒律、特に律藏というものを研究の土俵にしなければならなくなってくるわけです。

そういうわけで、平川先生のお仕事を辿ろうと思ったわけでもないのですが、いつのまにかその後を追うかたちで、ひとりでに興味の対象が大乗の発生という方向にも向きまして、戒律研究を土台にしながら大乗の起源を見ていくという、そういう方向性ができてしまいました。それで私も、平川先生の本を手本にして書いた『インド仏教変移論』という研究書の中で、この問題に関して自説を提示したわけなのですけれども、本筋は、まだまだ私などの手の届かない所に大きな問題として残っております。それで今日は、私自身が行っている研究というよりも、むしろ岡目八目で、外から見ている私が、大乗仏教の起源に関する研究の問題点をどこに見ているかというようなお話をしていきたいと思っております。もし時間があれば、最後に私自身が関わった問題もお話しますけれども、それはまあ付録です。大事なのは、この学問領域が今どういう状況にさしかかっているかということを知っていただくという点にあります。ここにおられる専門家の先生方に、今さら大乗仏教起源説の過去の流れをご紹介します必要もないと思うのですが、この問題に余り馴染みのない方も聴衆の中におられるかとも思いますので、少し過去を振り返りまして、この問題がどう進展して、どう変わってきたのかということを歴史をさかのぼってお話したいと思います。

この大乘仏教の起源の研究というのは、何をおいても平川彰先生が発表なさった平川説という学説が要に來ますので、まずそれを中心において、「平川説の前と後」という形で考えていかなければならないと思います。まず、平川説の前の話をします。前と言ってもずっと前でして、千年以上前、たとえば奈良時代とか平安時代といった頃にまで遡ってみます。大乘という名で呼ばれる特定の種類の仏教があることは分かっていたのですが、その大乘の起源を探索しよう、というような流れはありませんでした。それは何故かといいますと、大乘仏教の起源を探索することの意味が無いからです。なぜ意味が無いかというと、その当時、あらゆるお経は皆お釈迦様がお説きになったものだと信じられていたので、その起源を探るといふ問題そのものがナンセンスだったからです。

「大乘の起源はお釈迦様に決まっているではないか」と考えられていたのです。大乘經典もすべて釈迦の直説であるという前提に立つ以上は、「大乘仏教は一体どこから出てきたんだろう」という疑問そのものが起こりようがないわけです。ではそのかわりにどういふ問題設定が表れるのかというと、いろんな大乘經典があるけれども、お釈迦様という一人の人物がなぜこのようなバラエティー豊かな經典群をお説きになったのだろうか、という、お釈迦様一人の歴史の中での經典の位置付けですね、そういうことを解明する方向に向かっていくわけです。これがいわゆる教相判釈のような一つの学問体系を作っていくことになります。これがずっと続きます。江戸時代の後期まで続きます。そしてそこで富永仲基が現れて大転換が起こるんですね。

富永の生没年を見ますと、一七一五年に生まれて一七四六年に亡くなっています。引き算しますと三十一。数え方によつては三十二。富永仲基は三十一、二歳で亡くなったのです。この人、江戸の後期に大阪の醤油問屋の息子さんとして生まれまして、醤油問屋をどう切り盛りしたのかは知りませんが、学問一筋で、二四歳の時に最初の本をお書きになる。そして死の前年、三十歳の時に『出定後語』という空前の大研究を完成させました。デビューが二四歳の時ですから、私いつも、自分の学生に「二四歳」といふと修士論文である。だから君らも修士論文でこれぐらいのものは書

きなさい」と、もちろん冗談で言うんですけれど、それは無茶な話で、二十代でこんな恐ろしい本を書いた富永という人の知性の深みはうかがい知れません。おそらく日本の歴史の中でも特筆すべき、特別に勝れた合理精神の持ち主であつたと思います。

その富永仲基という人は、その本の中で「加上説」というものを主張します。これはどういうものかといいますと、数多くある大乘仏典のほとんど、あるいは全てと言ってもいいですが、それは釈迦の直説ではない、という考え方です。しかしそれだけではない。富永が偉かつたのは、その根拠をきちんと出したことです。全てのそういった經典を讀んだ上で、Aという經典の説を基にして次の人がBという經典を作つたのである。そのBの説をさらに次の人が換骨奪胎、あるいはそれに付加増広してCという經典を作つたという具合に、次第次第に、大乘經典全体が付加改編の歴史によつて作られてきた、というこれが「加上説」です。上にだんだん加えていくことで出来てきたという意味です。

それでは、その総体的な流れの中で一番初めの土台にくるのは何だというと、最も単純明快な教説ということになりますから、当然のことながら阿含經ということになります。そこがまたすごいですね。だから富永がこの時に考えた經典の成立段階は、ほぼ、今現在の仏敎が想定している經典の流れに合うという形になっている。素晴らしいですね。しかし当然ながら、時代は江戸ですから、これは仏敎界から見ればとてもない邪説ということになります。

大乘經典がお釈迦様の言葉でないなどとはとてもない話だ、ということ、富永の説は仏敎界から大変な批判を受けます。その一方で、仏敎を好かない、仏敎が嫌いな国学者たちからは大いに受け入れられて、例えば平田篤胤などはこの富永を大いに賞賛するわけです。仏敎界では全く無視され、あるいはものすごい非難轟々の中、富永が三十一歳で死んだ時も「業病で死んだ」つまり「自業自得だ」、という声が仏敎界の中からあがつたということです。

したがって、この素晴らしい学説もやがて霞んでいくのですが、それが明治になりますと、文明開化となり、海外

へ行つてヨーロッパの仏教研究を目的にした日本の学者たちは、大乘仏教經典の存在しない仏教世界があるということに気がつくわけですね。いわゆるスリランカ、タイなどの上座部仏教国のことです。こういった国に行きますと、パーリ語で書かれた阿含經しか使っていない。しかも言語的研究によつて、それらの阿含經典は大乘經典より古い可能性が高いということが分かる。そうすると途端に、この富永伸基說が息を吹き返してきます。

この時期、太いに富永の再評価に力を尽くしたのが内藤湖南です。内藤湖南は、この富永の說は素晴らしいんだ、と言つて広く世に広め、そのおかげで富永の說は息を吹き返すわけです。こうして、この段階ではじめて、「大乘經典が釈迦の直說でないならば」という前提が登場するわけで、釈迦の直說でないならば、それなら誰が作ったのか、ということ、大乘仏教の起源という問題がこの時点で初めて、仏教界で真剣に議論されるようになるのです。

一番最初は、実証的、分析的にやるという段階ではなくて、まずはなにか関係のある情報を探してみようということ、日本の学者が探したところ、一種の言い伝えですけれども、「大乘仏教は、たぐさんに枝分かれた部派仏教の中の、大衆部といわれる部派から出た」という説に注目が集まります。伝説によりますと、仏教は最初一つにまとまっていたんですが、それが後に、根本分裂という分裂により、大衆部と上座部に分かれ、そしてさらにそれが枝分かれして、およそ20の小さな部派へと分かれていったんだと言われています。よく仏教史の本なんか書いてあるものですが、その一番最初の根本分裂で分かれた大衆部ですね、そこから大乘仏教が出たという説が論書の中にありまして、本に書いてあるんだからそうだろうということ、大衆部から大乘仏教ができたという説が脚光を浴びるわけです。これは海外にもそのまま伝わりまして、海外の学者たちも、なるほど、それならばそうなんだろう、という風にある程度納得しています。

ところがその後、そこに平川説が登場するわけです。一九六八年の『初期大乘仏教の研究』という立派な本の中で、それまでの通説を覆す新説が登場するのです。それはどういふものかといいますと、釈迦と大乘仏教は直接には繋が

っていないという考え方です。お釈迦様から繋がっている仏教というのは、いわゆる出家者の仏教ですから、サンガの中で暮らす部派の人達の仏教です。そしてその教えは、大乘的なものではなくて、いわゆる仏道修行によって阿羅漢を目指すという本来の声聞乗の仏教であった。ところが、紀元前後の頃でしょうね、新しい動きが起こり、お坊さんとは関係のない一般の信者さん、つまり在家の人たちが、お寺に集まるわけにはいきませんから、仏教に関係はあるけれどもお寺ではない場所、つまりブツダの遺骨を祀った仏塔、インド語で言えばストウーパの周りに集まり、そこで独自の仏教運動を起こしていつて、そしてその中で生まれてきたのが様々な大乘経典なのである、という新しい学説を提示したのです。

この『初期大乘仏教の研究』は八百ページを越える大著で、非常に緻密な論証になっていて、絶大な説得力でもって当時の日本の仏教界に強いインパクトを与えました。時を同じくしてヨーロッパでは、エティエンヌ・ラモットという、これまた高名な学者さんが、平川説とは別個に、大乘仏教は在家がつくったんじゃないだろうかと主張したものですから、洋の東西ではほぼ同時に、大乘仏教は在家から出てきたという説が大きくクローズアップされたわけです。この平川説は日本の学界で広く受け入れられました。私も大学院生の頃は、大乘仏教の起源といえば平川説だと習いましたし、まずそれをやらなくちゃいけないというような感じでしたね。

しかしながら、今の状況を先取りして言いますと、もうこの平川説というのは現在においては崩れております。およそ二十年ほど前から崩れ始めまして、今では平川説を学界の中でそのまま信奉している人はまずおられないと思うんですが、ただ一つ問題なのは、不勉強な研究者の間では、この段階の情報、つまり平川説こそが大乘仏教の起源説としての正當説である、定説であるという考え方がまだ流布しているんですね。その代表が、今、随分と売れているようですが『ゆかいな仏教』という、本屋さんに並んでいます、仏教の解説書です。橋爪大三郎という人と大澤真幸という人が共同で書いた仏教書です。これを見ますと、橋爪大三郎という人は宗教社会学者という肩書きなのです

が、全く無条件に平川説をそのまま主張している。大乘仏教は、仏塔を中心に集まっていた在家信者がつくったものだ、と解説しているのです。全く仏教学の勉強をしていない。ここ三十年近くの仏教学が大きく変わったということを全く知らずに、たぶん、三十年前にどこかの概説書を読んだのでしようが、それがそのまま頭に刷り込まれていて、呑気に発言しているわけで、私から見ると、お粗末な学問だなぁという気がいたします。こういう人が、学者として発言していることが問題なのです。これに対して大澤さんはそういった情報もきちんと押さえておられて、しっかりした感じですよ。

ひょっとしたら皆さんの中にも、仏教学なんてものは進歩しない学問だと思っている方がおられるのではないでしょう。三十年前に定説とされていたことが、三十年たったらぜんぜん別の説になっているなんていうことは、それは物理学や生物学にはあるかもしれないけれども、仏教みたいに何千年も前のことをコツコツやっている歴史学で、学説がコロッと変わるなんていうことはあり得ないかと思っています。しかし、それは大きな間違いであり、仏教学というのは非常にまっとうな学問でありまして、資料をどのような視点で解説するかということが、常に新しい情報を生み出している学問でありますから、三十年も経てば大きく変わるんです。橋爪さんという人は、そういう学問の本質を認識しておられないんだろうなあとと思います。

で、話を平川説に絞っていきますが、この説の成り立ちを順を追って見ていきますと、実は平川先生は若い頃は違うことを考えていたんですね。大乘仏教は出家者、つまりお坊さんの世界から出てきたと考えておられたんです。それがある時期から、何か急にターンして、ヘアピンターンで回っちゃって、急に在家起源説へシフトしていくことがわかります。なぜかは知りません。おそらく個人的な何か想いとか閃きがあったんだろうと思います。こうして大乘の起源を在家信者の集団と見る平川説は、当時の仏教学の定説となっています。

次は「平川説以後」の話です。二十五年位前だと思いますが、平川説に対する批判が同時並行的に起こってくるわ

けです。私を知っているその当時、ああこの人、平川説に反対する立場にいなあ思った人を言いますと、グレゴリー・シヨペン、ポール・ハリソン、ジャン・ナティエ、ジョナサン・シルク、下田正弘。そして私もその一人でした。そういう人たちが平川説はどうも怪しいというようなことを、一緒に言って言うんじゃないくて、それぞれの違った領域から見て「違う」と言って、後で顔を合わせて話してみたら「そうそう、間違ってるよね」というように、意見が一致する、そんな感じで同時並行的に反平川説が出てくるようになります。領域はみんな違うんですが、平川説に反対するという点では方向性が一致するんです。

「平川説への反対」というのはどういう意味かといいますと、大乘仏教の成立にはサンガの中で暮らす比丘たちが大いに関わっていたはずであるという考え方です。平川説が言っているのは、大乘仏教には本来は出家は関わっていなかった、在家だけで成立したものだ、という主張です。もちろん後になって運動が大きくなつてくると、周りのお寺との繋がりも出てきて、次第に部派仏教のサンガと繋がりも出てくるのだけれども、その繋がりが出てくるという状態はあくまで後になって現れた現象であつて、一番最初は在家だけでスタートした、ということです。

それに対して、反対をする我々の共通の主張は、一番最初の段階からお坊さんは関わっていた、というものです。在家が関わっていなかったとはいいません。そんなことはあり得ない。お坊さんが関わっている以上は、それをサポートする在家もいたわけですから、結局は、在家と出家の混合体、お寺とそれを支える人々の中から大乘仏教のお経が作られていったんだという考え方ですね。これがこの当時の反平川説に共通する考え方です。ただし、それをどんな資料に基づいてどうやって論証していくのかということになりますと、今、名前を挙げた人たちはみんな違う領域、自分の領域の中からそれを見出していくわけですね。

そういうわけで、私自身は『インド仏教変移論』という本の中で自説をまとめて出しました。そのあとさらに、この大谷大学の櫻部建先生の記念論集にも続編を出しました（「部派仏教の概念に関するいささか奇妙な提言」）『櫻部建博士

喜寿記念論集 初期仏教からアビダルマへ』(2002, pp. 57-71)。しかしながら問題は、こうやって反平川説の狼煙はいろいろ

なところから上がってきて、私はそれでいいと思っているのですが、しかしながらその動きが一本化しないということ。これはいまだにそうなんです。こうやって研究してきた人たちの話がひとつにまとまって、「大乘仏教は平川説ではなくて、こういう形で起こってきたんです」という、平川説に替わる新しい説が共通の認識として出てきていない。今ある共通認識は一つだけです。それは、「大乘の発生には、お坊さんも関わっていた」。それだけです。だから、どこのどんなお坊さんが、どういう理由で、どんなふうに関わっていたのかというような具体的な問題に関しては、今もまだこれは暗中模索という状態です。

今までも、これを一本化しようという動きはありませんでした。それはまあ、学会とかシンポジウムの形態を取るわけですから、何人かの、そういった、ここに名前を挙げたような人達が集まって、一緒になって話しあえば、共通の話題の中から「ああそうだね」と言って学説がでてくるんじゃないかという期待なんです。残念ながらこれは上手くいかない。理由はね、やっぱりおそろく、それぞれの領域の研究がまだ深まっていないんです。それから、それぞれの領域の学者がどういう視点で研究をすれば、お互いが繋がっていくのかというその共通の視点が見つからないんです。これは、そういう視点が存在しないという意味ではありません。私の感覚で言うと、あるはずなんです。共通の視点は必ずあるはずなんです。その視点のベクトルが揃わないんですね。まあ言ってみれば、もつとそれぞれの人が研究を深めて、その成果を互いに共有しながら何十年も思考を続ける中で方向性が出てくるんだろうと思うのですが、今は誰一人、その方向性を明示することはできないという、多少残念な状況にあります。

今までに、そういう意味で大乘仏教の起源を一つにまとめようという動きはいくつかありましたのでご紹介しますと、二〇〇一年、スタンフォード大学で小さな討論形式の会議が開催されました。「大乘仏教の起源」に関する学会、グレゴリー・シヨペンやポール・ハリソン、ジャン・ナティエ、みんな集まって、日本からは私と本庄さん(本庄良

文氏)と下田さんが参加しまして、そういうのをやりました。司会はミュンヘンのハルトマンさんがやりましたが、最後の総括で「全然まとまらなかったじゃないか」とすごく怒ってました。総括なんだからもうちょっといいこと言ってくれてもいいじゃないかと思うんですが、「三日間やったけれども全然まとまらなかったじゃないか」というのが最後の結論でした。結局、みんながそれぞれ自分の領域の話をしてそれで終わってしまいました。

次に二〇〇三年には東京の東方学会で同じような会がありまして、これはその後、雑誌になりました。これもいろんな人が来てやりましたけれども、それぞれの領域について話して、それだけです。

そして三番目は去年です。英国のOxford大学というところで行われた学会で、そこに行って気がついたのは、今言った二回の学会とは顔ぶれが変わってしまったということです。ジェネレーションが変わったということを非常に強く感じました。もう最近になると私は爺さん格でして、私より二十歳以上若い人たちが代表として来ておりました。これについては後でちょっとお話をします。この学会は非常に重要な意味を持っておりますので。

私自身は大乗仏教の起源そのものを本領としている研究者ではなくて、私が今やっているのは、大乗とは関係のない、もっと古い阿含時代の律や阿含経をバラバラに分解していくという解体作業をずっとやっております、玉ねぎの皮をむく様にして、古い層と新しい層を分けていくという、それに一番興味を持っているんですが、それをやりながらも、やはり大乗仏教の起源には興味がありますので、いろんな所で考えたり、書いたりはしています。

それで、この大乗仏教起源説の進むべき方向性を幾つかレジュメに書いてきました。これは以前、学会誌でも書いたものなのですが、一応、読んでみましょうか。

(1)「大乗仏教はシャカムニ以来の仏教僧団の内部から生まれたものであり、平川説が言うような、在家集団を起源とするものではない」。これはまず共通認識として持ちましょう。ただし、その大乗の出家者を支援する在家者が存在したことは当然予想されます。したがって厳密に言うなら、シャカムニ以来の僧団の内部にいた出家者と、それ

を支援する在家者が一体となって大乘仏教を起こした、ということになる。これはもう申し上げました。まずこれは、基本的な土台として我々は認識すべきであろうと考えます。まあもちろんね、「それは信じません。私は平川説がいいです」っていう人もいるかもしれませんが、大枠、この前提に基づかないと研究は進まないであろうと思います。それから、(2)「大乘仏教と部派仏教を対立概念と見ることは出来ないであろう。部派仏教と大乘仏教は、実は同一の原因から生じた二方向の現象であつたという可能性が高い」。これは私の説ですから反論されても構いませんが、私は大乘仏教の成立と部派仏教の成立というのは実は同じ現象だという、ちょっと過激な説を持っています。平川説が成り立たない以上は、サンガの中で大乘はできたわけですから、部派仏教と大乘仏教がお互いに相容れない、対立する現象であるとは言えなくなるわけです。同じ場所から出てきた二つの現象というふうに捉えざるをえない。したがって両者は対立するところか、むしろ同一現象と見るべきものである。我々は部派仏教というのは仏教独自のきわめて特異な現象であるという点にもっと注目すべきである、とこれも私の持論です。

部派仏教、部派仏教と私達は簡単に言います。しかし「仏教は二十の部派に分かれたんです」「ああそうですか」と簡単に納得してはいけないのであって、ジャイナ教などは全然分れていない。白衣派と空衣派くらいにしか分かれていない。しかも大事なことは、二十いくつに分かれた仏教の部派が、お互いの名前を認め合って、あなたは法蔵部さんですね、私は説一切有部です、という風にそれぞれを個別名称で呼び合うというのは、これは非常に異様な状態なわけです。同じ仏教の中の、自分と違う異質なものを、正式な構成員として認めているということですね。この点がとても大切です。仏教世界の中で、異質なものととの共存を当たり前のものとして認めるからこそ、部派仏教という現象が可能になるのであり、その延長として大乘仏教にそのまま適用できる見方でもあります。同じ仏教の中から、阿含経の教えとは全く違う考えを持つものが出てきたとしても、それを仏教の教えの一形態として認めるというのは、これは部派仏教のものの見方と非常に似ているんですね。

私がこの二つを、ひとつの現象の裏表じゃないかというのはそういうことです。ただ、部派仏教から大乘が出てきたように思えるのは、それは時間差である、つまり、部派仏教というのはすでに幾つかに違っていたもの同士、言ってみれば対立していたもの同士が、ある時にお互いに認め合いましようね、おなじ仏教なんですからね、と言ったその瞬間に部派仏教は成立します。別に何が変化しなくても、ものの見方を変えた瞬間に部派仏教は成立します。それに對して大乘仏教というのは、今までなかった新しいものの考え方、例えば般若經だとか法華經などの新たな思想が少しずつ出てきて、それが力を持つていくという現象ですから、これは瞬間的に成立するのではなくて、長い時間をかけて次第に發展していくという性格の現象です。だから現象の本質は同じなのですが、起こってくる進行速度がぜんぜん違う。ですから、それを後から振り返ってみますと、あたかも部派仏教が最初に成立していて、そこから大乘仏教が次第に現れてきたようにみえる、というふうに私は考えています。まあこれはまだまだ、そんなに実証的なものではありません。仮説ですけども、そのように考えています。詳しくは、櫻部先生の記念論集に書いた論文を見てください。

次に(3)「仏教思想を、大乘、非大乘という区分で厳密に分類することは出来ない。仏教僧団の内部から次第に大乘が現れたのなら、その過程においては必ず一種のグレイゾーンが存在しているはずだからである」。つまり部派から大乘へ、あるいは、釈迦本来の仏教から大乘へと移り変わっていく時のグレイゾーンはどこだ、と探索する意識も必要だということです。

それから次は、(4)「思想の多様化が容認されたことが原因となつて大乘が発生したとするなら、大乘は多元的に発生したということになる。それならば、大乘の起源を単一のグループや単一の部派に求めることは不合理である。もちろん、そのような可能性も考慮しつつ研究を進めることは必要だが、決して最初から単一起源を想定して研究に着手してはならない」。これは絶対にしてはならない研究方法です。一旦、そういった単一起源説に引き込まれると、

元の状態には引き返せなくなる。大変危険な研究方法です。それはこういうことです。反平川説の立場に立つ研究者が大乗の起源を探索する際に、どういった前提で進めるかということに関しては二つの可能性があります。一つは、一番最初に表れた大衆部起源説のように、大衆部などの、どれか一つの部派から出てきたんだという前提。そしてもう一つは、今我々が考えているように、汎部派的という感じで、いろいろなセクトを超えたところから、共通して同時多発的に大乗が出てきたという前提です。

もしも前者の説に凝り固まって、「絶対に大衆部から出てきたんだ」というふうに決めつけて研究をするとうまくないかと、この研究はうまくいくんです。なぜならば、どちらの説にしたって大乘仏教の中に大衆部の要素はあるからです。本当は、部派をまたいで仏教界全体から大乗が出てきたとしても、その中には大衆部の要素も入っているわけですから、探そうと思えば見つかるわけです。で、見つけた人はどう思うかというと、「見つけた」と思うんです。それで自分の説は論証されたと思うんです。つまり、大乘仏教は大衆部という一つの部派から出たという説に確信が持ててしまうわけです。そして、一旦その説に固執したら、他の部派の要素が目に入らなくなってしまう。結果として、その説一本で押し通すことになる。先入観に囚われやすくなるということです。

一方それとは逆に、いろいろな部派の中から大乗が出てきた、という前提で見れば、大乘と特定の部派を繋ぐ要素が見つかったとしても、「じゃあ、他の部派の要素はないのか。他の部派から出た可能性はないのか」というふうに、さらに別のポイントへと視点を移していくことができます。だから、そちらの前提を残しておかないと、例えば、「大衆部起源説一本なんだ」などと言っていると、その自分の思い込みに引き込まれて、自分の研究が袋小路に入るという危険性を持っているということです。

それで、具体的な今後の方針を考えてみたいと思います。お配りした資料には私の見解も書きましたが、その下に、ハリソンの見解というのも書いてありますね。これは何が言いたいのかといいますと、私の見解もありますし、ハリ

ソンの見解もあって、そこには共通しているものもあるし、私には思いもつかなかったような新しいアイデアもあるということ、両者を比較しながら見ていこうと思って、それで二つ並べてみました。このハリソンの見解というのは、先ほど言いました、二〇一二年にCardiff大学で開かれた学会で、主催者のポール・ハリソンが発表したものです。

まず私の方の見解を順に見ていきましょう。最初に仏塔の問題。平川説再考です。先程言いましたように、平川説は間違っているということになったのですが、この否定の思いが極端に進みますと、平川説は一から十まで全部間違いである、平川説はもう考慮する必要がないというようなところでもない考えに行き着く可能性があります。しかし実際のところ、平川説は95%、その価値を残しております。平川説で否定されるべき部分は一箇所しかありません。それは何かというと、仏塔を中心に集まっていた人たちは、全部、在家者であつたというその一点だけです。仏塔を中心に集まっていたということは全然否定されていません。仏塔を中心にしていた大乘グループというものも必ずあります。もちろんそうでないグループもありますが。そういう仏塔に集う人たちが大乘經典を作ったのであるというんですから、そのアイデアは今もそのまま活かしています。

さつき言いましたでしょ。平川先生は、最初は平川説と反対のことを考えていたんです。反対のことを言おうと思つてどんどん分析をして、研究を進めていつて、最後にそれを自分でひっくり返して在家起源説になったのですから、実は、そのひっくり返すまでに積み上げてきた学問の方向性というのは、我々と同じ方向を向いていたわけです。その時に積み上げてきた情報というのは、我々にとつては無くてはならない貴重な情報です。ですから、平川先生の『初期大乘仏教の研究』をまず読むこと、これは絶対に必要な作業だ、というのが私の考え方です。

それから、2番目に「菩薩の住処」の問題。これはたまたまですけれどもハリソンの意見と重なりました。菩薩はどこに住んでいたのかという話です。つまり大乘仏教を作った人はどこに居たのか。これはとても大事な問題ですね。

大乘仏教の本質に関わってきます。今、多くの研究者が考えているのは「アランヤ説」です。お寺の中にいて、在家の人からお布施をもらってのほほんと暮らしていたそれまでの旧態然とした伝統的教団に対立する形で、新たな革新的運動として大乘が出てきたのであるというならば、その人達は、従来のお寺の中でのほほんとしていた人たちではなからうということですね。そうすると、お寺の中に住んでいないお坊さんとは一体何者か、という疑問が生じますね。その答がアランヤ、というわけです。アランヤというのは、もともとインド語では森という意味ですが、実際にインド仏教の定義で見ますと森ではありません。これは郊外です。村とか街などの大勢の人が住んでいる場所よりも、おそらく数キロメートル、4キロとか5キロとか、それくらい離れた人けのない場所に暮らす、そういうお坊さんたちがいたわけですね。で、そういう人が大乘經典の担い手ではないか、という説が非常に強くなってきています。

去年のCardiff大学の学会に行きましたら、多くの若手の学者たちがこの説を盛んに議論していました。ハリソンの意見を簡単に言います。いろいろな学者の研究によると、どうも大乘經典を作った人たちの住処は、町なかではなくてアランヤなのではないかと思えてくる。したがって大乘の発生状況を研究するためには、アランヤにおけるサンガの活動を一層解明する必要があるということになる。ところが面白いことにハリソンは、私がこれについて研究していたことを全然知らなくて、次のように言うんですね。「確かにアランヤに住む僧侶が大乘の成立に関わっていた可能性はある。しかし、アランヤ、アランヤと言ったって、アランヤの中でお坊さんがたった一人で戒律も守らずに暮らしている、そんな人がお坊さんとして認められるはずがないじゃないか、お坊さんである以上はサンガのメンバーであるはずだし、したがってアランヤで暮らしているお坊さんもやはりサンガの戒律を守って暮らしているはずじゃないか、そのことをもう一度、詳しく考えて見る必要がある」と言うのです。

私はすでにそのことは考えていて、何年か前にすでにその論文を書いています。論文の内容は、アランヤのお坊さんもちろんとサンガを作って、アランヤのサンガというもので、他の一般の僧侶と全く同じ律を守って暮らしてい

た。町なかであろうがアランヤであろうが、仏教の僧侶というものは全く同じ状況で暮らしている。そのことが律蔵そのものの中に詳しく出ている、というのが結論です。そういう情報を私は網羅的に探してきて論文の中で提示しました。ですからそれをもとにして考えれば、アランヤの中で暮らしているお坊さんは、従来の部派のお坊さんとは全く異質のグループだと想定する必要は全然無い。したがって、もし仮に大乘を作ったのがアランヤに住むお坊さんだとしても、だからといって「大乘は従来の部派仏教とは別のところで成立した」という、平川説風の状況を考えることにはならない、ということです。大乘は伝統的部派教団の内部から発生した、という現在の枠組みはそのまま保持されるのです。この論文を学会でハリソンに渡したら、とても喜んでいました。

次いで3番の見解。「大乘經典の精密な分析」ですね。これは後で取り上げますけれども、特定の大乘經典、例えば「大乘涅槃經」だとか「法華經」などを取り上げて、それをとにかく緻密に分析していく。従来のもつともオーソドックスな大乘仏教研究ですが、この方法はまだまだ研究の余地があります。最近もそういう研究が相次いでいますから、もうやり尽くされたなんていうことは全くないので、我々がだれでも知っている大乘經典でも、もう一度研究すれば、まだいくらかでもそこから大乘の起源説に関する新しい知見が出てきます。特に、平川説が崩れたことによつて、平川説ではない別の視点にもとづいて經典をもう一度読み直すという作業が必要ですが、これがまだそれほど本格的に行われていないように思います。これは実は、古いけれども非常に新しい研究方法であるというふうに思っております。

それから4番。「仏説・非仏説論の研究」ですね。これは本庄さんとか藤田さん（藤田祥道氏）とか堀内さん（堀内俊郎氏）などが進めている、論書やお経の中に表れる「本当の仏の言葉とは何だ」という問題をめぐる議論の研究です。仏の言葉と仏の言葉でないものを区別する基準はなんだろう？という議論がいろいろなところに出てくる。これが大乘の発生に深く関わってくるのは当然のことです。それまで存在しなかった大乘仏教のお経を、「これは仏の

教えです」といつて主張する人が出てくるわけですから、当然その時には、今までなかったものを受け入れてもらうための何らかの理屈が必要になります。その理屈が、どこどのように語られているかを見ていくことによって、大乘の発生状況に関わる情報を入手できるかもしれないのです。ですからこの方面の研究の進展に注目しておくことも重要です。

それから5番目が、「大乘の発生と同時期に制作された資料の調査」。これはとても重要なことです。例えば、今日は宮下さん（宮下晴輝氏）が来ておられますが、宮下さんなんかもそういう研究をなさっている貴重な学者さんです。大乘仏教の成立を研究するためには、大乘經典だけ読んでいてもだめなんです。大乘經典がなぜ作られたのかを知るためには、大乘經典が作られる前の情報を知らなければいけません。それは、大乘仏教とは直接関係のない、同じ時期につくられた別の領域の資料の中に見つかるはずなんです。大乘經典自身は、自分たちを正当化するために自分たちの立場を良く言いますから、その情報は必ずバイアスがかかっています。それに対して、大乘仏教とは関係のない人たちが書いた資料のなかに、もし大乘の情報が入っているとすれば、それはニュートラルな形で入っている可能性がある。つまり、歴史的信憑性の高い情報が見つかる可能性があるということです。それは例えば、有部のアビダルマとか、あるいはパーリ語の注釈文献ですね。それらは時代的に大乘の発生期と合いますから。この辺りの資料から大乘の要素を抜き出してくるという作業が必要になると思います。これはなかなか難しいことで、深い洞察力を必要とする作業ですが、もしうまくいけば非常に価値の高い成果を生み出すことができるでしょう。

それから、6番目は、「パーリ上座部、および『婆沙論』以前の有部の正体解明」です。今のスリランカや東南アジアに伝わる、いわゆるパーリ上座部と、それから『婆沙論』を生み出す以前の説一切有部、この二つの集団の正体解明が重要だ、という意味です。正体解明というと、なんだか恐ろしげな言い方ですが、私はこの二つの集団は、部派ではないと思っています。つまり、お互いにお互いを仏教の一員として認め合うという視点が生まれる前の段

階の状態を残しているグループではないかと疑っております。例えば、今のパーリ上座部には「テラヴァーダ（上座部）」とか「ヴィバツジャヴァーディン（分別説部）」とか、複数の呼び名がありますが、あの南方のグループだけを指す特定の名前はないんです。テラヴァーダと言ったらあのグループだけじゃない。他にも一杯あったんです。そもそも、根本分裂の伝説で二つに分かれたと言われる、その一方に属する部派はすべてテラヴァーダです。それからヴィバツジャヴァーディンにしても、その名前は『婆沙論』の中にも沢山あらわれてきますが、それは決して南方のあのグループを指している名前じゃありません。そうすると、あの南方の、スリランカや東南アジアの仏教グループの、固有名称はない、ということになります。便宜上、今はテラヴァーダと呼んでいますが、その本名は伝わっていないのです。「本名はない」、と考えるべきではないかと思います。名前を持っていないということは、特定の名前を必要としなかった時代の集団なのではないかということになります。仏教が多様化し枝分かれして、お互いを認め合うために呼び名が必要となる、そういう状況が表れる前の、原初の姿を残しているのが今の南方諸国の仏教なのではないか、そういう予想です。

それから説一切有部も、『婆沙論』になっていろいろな学説が検討され、「あの説は違う」「この説は正しい」というふうな取捨選択が行われますが、それ以前の有部というのは、ひょっとしたら南方諸国のグループと同じように、自分たちを唯一の仏教集団だと考えていて、仏教の多様性を認めていなかったのではないかと思います。これはまだ推測の段階で、確実なことはなにも分かりませんが。この辺りも大乘仏教の起源を解明する切り口になる可能性があると思います。特に有部の方は、私の専門であります律研究の方面から見ても、『十誦律』と「根本有部律」の関係が非常に重大な意味を持つてくるだろうと思っております。最近、『十誦律』と「根本有部律」はどちらも有部という同じ一つの部派の律であって、「根本有部」という別個の部派は存在しなかった、という説が広まっています。いろいろな人が言っているようですが、この説の最初の提唱者が大谷大学の先生だったということは、この大谷大学の

人でもあまりご存じないのではないかと思います。その論文は、私の大好きな『大谷学報』に載っています。徳岡亮英氏の「印度仏教における部派について ―フ라우ワルナーの近著を読んで―」という論文です。是非読んでみてください（『大谷学報』第四十巻第三号、昭和三十五年）。

この領域での私の仕事のひとつとして、『婆沙論』に出てくる律の引用箇所を全部ピックアップして、それが『十誦律』なのか「根本有部律」なのかを調査してみました。しかし結果は奇妙なものになりました。『十誦律』にぴたりと合うものもある。「根本有部律」と合うものもある。両方と一致するものもある。そしておかしいことに、どちらにも合わないものもある。そうすると素直に考えれば、『婆沙論』時代の有部は、今ある二系統の有部の律とは違う、別の律を使っていた可能性があるんですね。この研究はまだ途中で、もっと精密に調査すれば面白いことが見つかりそうです。そういうこともありますから、律の系統を調べることで、有部の変遷が分かる可能性があります。それがひいては大乗研究へと繋がっていくかもしれません。

それから7番目の「大乘」という名称の研究」。これは辛嶋さん（辛嶋静志氏）がやっていて、Maḍāyānaというのはもともと Mahāyāna じゃなかったかという説です。もしそうだとすると、大乘という概念そのものの歴史的変遷が解明される可能性があります。要注目ですね。

これで私の方の見解を終えて、次にハリソンの方に移りましょう。一番目はもう言いました。例のアランヤに住む僧侶の話ですね。これは私の考えと同一線上にあります。それから2番目に彼は、「大乘經典における在家の役割をもっと詳しく調べるべきである」と言っています。Vinaya (維摩) とか Uḡra (郁伽長者) とかそういう人をもうちよつと研究する必要があるというのです。そこから、大乘成立時の出家と在家の関係が明らかになる、というふうに考えですね。

それから3番目ですが、これは面白いですね。「經典間の時代的相関関係をマッピングせよ」、というんですね。一

人の研究者が、あるお経について、「これはこの部分が新しくて、ここが増広されたに違いない」などというんなことを見つけて発表します。でも、他の人がやっている研究との結びつきが見えないので、大乘經典全体の中の相互関係がよくわからないままにそれで終わってしまう。だからこれを、全体図の中にマッピングすることによって関連する所を全部洗い出していく、という考え。これは大勢が協力するプロジェクトのかたちじゃないと出来ませんよね。一人の学者には出来ません。おそらく今ならコンピュータを使う大きなプロジェクトになるでしょう。例えば脳科学の分野でしたら、脳細胞の一個ごとの働きをマッピングしていますよね。この作業を積み上げていくと、もうとても人間業では出来ないような細かい相互関係の図ができますね。それを使って、脳全体の働きを有機的、総括的に理解していくという方向です。今、脳科学者はそういうことをやっていますが、多分ハリソンは同じようなことを大乘經典全体に應用して、大乘經典の詳細な相關マップを作ろうと考えているのでしょう。すごく斬新ですね。とても面白そうです。

それから4番目が「大乘と、部派仏教およびアビダルマ仏教との同時並行的な成立過程の研究」。これは私の見解の四番でも言ったことです。同じことを考えているんですね。

次に5番目が「考古学および美術史からの証拠」ですね。ハリソン自身は特にこの方面に力を入れているようです。これについては、去年の学会で大きな流れの変化を感じました。一言でいえば、グレゴリー・シヨペンの説が崩れかけている、あるいは否定されかけているという流れを非常に強く感じました。ハリソンを旗頭として、それに続く若手の人たちが一様に言うのが、シヨペン説は行き過ぎだ、という主張です。ことさらに物事を大げさに言い過ぎている。だからシヨペン説はもう一度洗いなおす必要があるということをよくの人が言いました。これは十年前だったら信じられないことで、ヨーロッパ、アメリカはシヨペン説一色だったんですね。シヨペンの主張は多岐に渡っているから、これからそのどこがどう批判されていくのか、という個別の箇所を示すのは面倒ですが、大枠で言うなら、

ことさらに「大乘仏教を過小評価しようとする姿勢」、ことさらに「根本有部律の記述を重視して、それ以外の律に載っている情報を無視しようとする姿勢」、ことさらに「考古学的情報として存在しないことを理由に、それが歴史上全く存在しなかったと主張しようとする姿勢」などが今後、批判されていくと思います。

今日、ここには持つてこなかったのですが、昨日、面白い情報をもりました。『ナシヨナルジオグラフィック』に載ったのですが、ルンビニにある石造りのマヤーデーヴィー寺院の下を掘ったら、その下から木造寺院の跡が出ました。木造です。ということは炭素分析が可能だということです。そこで炭素分析したら紀元前六世紀、つまり紀元前五〇〇年代のものだという結果が出た。それが仏教寺院だとすると、仏教は紀元前五〇〇年代にはすでにルンビニにお寺を建てるほどの宗教として存在していたということになる。そうすると、仏滅年代が北伝説ではなくて南伝説、つまりお釈迦様は紀元前五〇〇年代にお生まれになって、四〇〇年代に亡くなったという説しか残らなくなる。

北伝説はもつと時代が新しくなるので、この情報と全く合わないんですね。しかもその南伝説だって怪しくなってくる。今回の炭素分析の結果と南伝説は、時間的にぎりぎりなんとかすり合わせ可能なところです。北伝説は否定され、南伝説でもぎりぎりセーフ。どっちも間違いかもしれない。そうすると、仏滅年代は全くの白紙に戻ります。だからこれはいへん大きな問題なんです。もちろん反論もあります。その寺院は仏教寺院じゃないかもしれない。それならいくら古くても、仏滅年代には影響しません。このルンビニ発掘の結果は、これからの仏教学で様々に議論されていくことになると思います。

ところでこの発見は、グレゴリー・シヨペンの説とも関係します。グレゴリー・シヨペンはこう言うんです。律蔵の情報というものは全部新しいんだと。仏教ができてからずっと後につくられたものであって、釈迦の時代の様子を反映しているものではない。お釈迦様よりも四〇〇年も五〇〇年も経った後の、紀元前後から後のお寺の様子しか律の中には記録されていないから、律蔵の情報をもって古代の釈迦のことを語ることは出来ない、というのがシヨペン

の持論なんです。

で、その理由は何かといいますと、律の中に出てくるお寺の様子は、体系的に運営されている大変立派な組織の存在を前提として描かれている。しかし考古学的に確認できる古い時代の寺院跡は、そういった組織的統一性を示しておらず、貧相で皆が個々バラバラに暮らしていたと思われる。したがって、サンガを立派な組織として描く律の記述は、ずっと後のものだ、ということになるのです。

このシヨペンに対しては、当然ながら、「ごく一部の、しかも仏教の中心地から離れた辺境の遺跡の考古学的調査によって、すべての初期仏教サンガを貧相で非組織的であったと断定することなどできない。考古学的情報は、それが現段階で出土していないからといって、それが歴史的に存在していなかったと断定することは絶対にできない」という反論が可能です。私もそういう反論の主張者の一人です。しかし今まではシヨペンの影響力が強くて、シヨペン説の面白さに惹かれる人が多かったんです。しかし今回のように、さんざん議論されてきた仏滅年代論が、たった一個の考古学的情報によって振り出しに戻る状況を目の当たりにすれば、シヨペンのような論理を研究の土台とすることの危険性に、あらためて気づかれます。

次に、大乘仏教の起源に関するいくつかのすぐれた研究の具体例をお話したいと思います。先ほども言いましたが、大乘経典そのものを厳密に分析していつて、そこから大乘の起源を探ろうというもつともオーソドックスな研究からいくつか取り上げてみましょう。平川説が崩れた後のこの二十数年間、そういうすぐれた研究の例はそんなにたくさんありません。ですから、そういうものを取り上げて、その特性をご紹介することには意味があると思います。ナティエやシルクの研究もありますが、今日は日本人の研究を三つご紹介しましょう。

まず第1番は下田正弘さんの『涅槃経の研究』ですね。これはもう革命的な研究だと私は思っています。この「涅槃経」というのは、もちろん「大乘涅槃経」です。その「大乘涅槃経」をどう分析したのかといいますと、結論だけ

言いますと、このお経は前半と後半に分かれていて、前半部分は dharmabhanaka つまり「法師」という、独自の大乘經典の担い手、大乘經典の作り手たちが作った。これが「涅槃經」というもののコアだ、というんですね。涅槃經は前半と後半に分かれていて、その前半が本来の「涅槃經」なんだと言うわけです。じゃあ後半は何なんだ、というと、後半は、その dharmabhanaka から「涅槃經」の本体を受け継いだ後の人たちが、その「涅槃經」をさらに人々に広めるために作り出した註釈だと言うんですね。「涅槃經」の註釈なんです。その註釈部分が前半の本体と合体して、一体となってその後の「涅槃經」になっていったという考えなんです。これを非常に実証的に、誰が見ても納得できる非常に明快な論理で論証したのが、この『涅槃經の研究』。これは大乘經典が作られていくプロセスの一つの典型的な形を示したという点で意味があると思います。

そう思うと、例えば南方のパーリ仏教を見ますと、本体がありますと、本体とは別に註釈を作るという流れがあります。註釈はいつでも本体とは別物であるという意識がある。それ対して北方の仏教を考えますと、註釈文献が異様に少ない。ほとんど無いんです。例えば私の専門の律を見ましても、パーリ語の律にはちゃんとサマンタパーサーデイカーというものすごく大きな註釈文献があります。ところが北の方の『四分律』や『五分律』などをみても、その律をきちんと註釈している註釈書なんて無いんです。付録文献はありますが、註釈書はない。じゃあ北方ではどうするのかというと、註釈文をそのまま律の中へ入れ込んでいきます。サマンタパーサーデイカーというパーリ語の註釈書の中に入っている同じ情報が、他の律では律の本文の中に入っているということです。そして律そのものが膨れ上がっていく。

これと同じ傾向に沿って、北方インドで大乘經典が作られたとするならば、本来コアとして作られていた大乘經典に註釈がつき、その註釈がその大乘經典の一部として經典自身に含まれていくというプロセスが、私としてはごく自然なように思えるわけです。そういう意味で、一つの大乘經典が作られていくプロセスを、その經典自身にそって実

証したという意味で、この『涅槃經の研究』は革命的な重要性を持っていると私は思います。

それから二人目が渡辺章悟さんですね。この人は、東洋大学で「般若經」を長年研究しておられます。渡辺さんが発表している、般若經成立史に関する論文を見ますと、非常に明快に、「般若經」という經典がどのような理念で作られていったか、そして、それが発展していく駆動力はどういうところにあるか、ということの説明しておられます。この一連の渡辺さんの般若經研究も、私は素晴らしいと思っています。なんといっても、渡辺さんの研究の眼目は、「般若經」を作った人たちが何を求めている、そしてその目的を実現するために、それまでの教義をどう変更し、どういった新機軸を導入したのか、という点を文献に即して実証的に示した点にあります。そしてその説明の中で、「般若經」の特性である「空」とか「般若波羅蜜」といった重要概念の意味が自ずから見えてくるのです。空の思想に関しては、私は自分の指導教官だった梶山雄一先生の説に納得しているのですが、渡辺さんの研究は、それを一層深く、文献に即して掘り下げていったものだと考えています。

それから3番目が、私の親友の平岡さん（平岡聡氏）のこの間出た、『法華經成立の新解釈』という本です。これはとても切れの良い本です。「法華經」のベースは仏伝である。「法華經」は仏伝をベースにして、その上に新しい思想を展開するという方法で出来上がっていったという説で、これは非常に革新的で面白いんですね。私は、この平岡さんの説を応援しよう、それが正しいことを再検証しようと思いい、それで「法華經」を読みながら、平岡さんの論証を跡付けしていったんです。しかし残念なことに、やはり「法華經」は仏伝をベースにして作られたのではない、という結論になりました。「法華經」のベースは仏伝ではない。平岡さんがなぜそれを仏伝だと思ったかということもよく理解できます。しかしながら、「法華經」の土台は仏伝ではないんです。なぜそれが仏伝に似た形になったかといひますと、もともと仏伝の中には初転法輪というエピソードがあつて、法華經を作った人は、「初転法輪で説かれたお経は阿含經だが、本当に大切なお経は法華經である。じゃあ法華經はいつ説かれたんだ？それは、第二の初転法

輪で説かれた。仏伝の中の、阿含の教えが説かれたとされる初転法輪とは違う、真の初転法輪というのがあって、それこそが法華経がこの世に現れたその瞬間なんだ」とそういうふうを考える。これが「法華経」のコアとなる部分です。そうすると、その真の初転法輪というエピソードも仏伝の一シーンということになりますから、当然、お経が発展すれば初転法輪に続いて、次のエピソードがこれ、次のエピソードがこれ、という風に連想で仏伝のシーンがそこに組み合わさって作られていくことになります。しかしながら、あくまでテーマは「真の初転法輪」であり、そして、本来は阿含の教えで救われると思っていたはずの阿羅漢たちが、実は全員が法華経によって救われて仏になるんですよ、という主張ですから、そこへいろんな仏弟子が現れてくるわけです。それが一見すると仏伝の中の、次々に仏弟子が出家していく様子に見えるのですが、実際はお経はそれを主題として書かれたわけではありません。ですから、当然ながら仏伝とは違う流れも表れてきます。

そういうわけで、残念ながら「法華経」仏伝説は認めることが出来ないのですが、しかし大事なことはですね、「法華経」の学者が山ほどいる、その中で、「法華経」にそれまで縁のなかった、あるいは専門でなかった平岡さんが果敢にその「法華経」に挑戦し、それはこうして生まれたんじゃないか、という学説を、文献的証拠を示しながら提示するという、そこにあるんです。それが大事なんです。つまり何が言いたいかというと、専門家だけが専門のことをわかっているわけではない、専門家は自分の先入観にがんじがらめになって一歩も出られない場合だってあるんだから、それを外側の人たちが「私もやってみよう」といって、みんながやり尽くしたと思われる経典をもう一度やりなおすという作業は、絶対に必要だということですね。それがこれからの大乘経典の起源を探る若い人たちの一つのあるべき姿勢です。その手本として、私はこの平岡さんの研究を非常に高く評価すべきだと思っております。

それで次は、「従来の研究に見られる問題点」ですね。第一番はやはり、シヨペン説でしょう。シヨペンの主張に

対して疑義が生じ始めているという点は、強く認識しておく必要があります。一時、西洋ではシヨペン説は定説のようによびわれ、猫も杓子もシヨペン、シヨペンと言っていました。西欧の研究者は、日本仏教や禪宗をやる人でも「シヨペン説によれば」なんて盛んに言っていたわけですが、それが今揺らぎ始めているという点は非常に重要です。シヨペンさんは決しているいい加減なことは言いません。非常に正しいことを言います。ただし、一つの正しい情報に基づいて言えることが一だとすると、それに対して、シヨペンさんは一つの正しい情報を基に三つも四つも言うんです。だから、その三の中には正しいことも一つ入っているんですが、残り二つは根拠が無い。「根拠が無いじゃないか。三は言いすぎじゃないの」って言うと、「言い過ぎだ」という証拠を出せ」となる。それでは困ってしまいますね。シヨペンさんは本当に面白くて良い人で昔から大好きな友人ですが、論理の過剰拡大が問題だとずっと思っていました。やっぱり最近、西洋でもそうなってきたなあと思っています。だから、シヨペンの言うことは間違いないのだけれど、どこまでがその情報によって確実に言えることなのか、そして、その情報によって言えないことまで飛躍してないか？ということのを常に頭のなかで検討しながら、もう一度読み直していく必要があると思います。

それから2番目の問題が、これが下田さんのことなんですね。この間の「印仏研」でも発表いたしました、下田さんが天才的な能力によって「涅槃経」の研究をなさった後に、下田さん自身が今、変わってきてるんですね（下田正弘とクレゴリー・シヨペン、大乘仏教の起源をめぐって）『印度学仏教学研究』第六一巻第一号、2012, pp. 177-186)。例えば、『涅槃経の研究』の結論を見直すって言っているんです。見直すって言うことは、その結論はやめたということです。私が、これは最高だって言っているのに、やっぱりそれはやめますと言われると、なんか二階に登って梯子を外されたみたいになりますけれども、下田さんのいろんな考え方をまとめて理解すると、結局は「大乘仏教はどこから生まれてきたかを考える必要はない」ということです。「大乘仏教の起源を探る必要はない」ということです。それは何故かと言うと、釈迦の本来の阿含経の中に、大乘仏教が生み出されるプログラムがもう組まれていたんだ、もって言

うと、大乘仏教は釈迦の教えの自然な延長であって、どうあったって自然に大乘仏教になるはずだったんだ、という考え方ですね。こういったことを、最近出版された、春秋社の『シリーズ大乘仏教』の一卷、二巻で表明しています。

これはどうしてそうなるのかというと、私の勝手な憶測ですが、下田さん自身は熱烈なる真宗信者ですから、そういう意味では自分の信仰、つまり浄土信仰というものが釈迦の教えの自然な流れである、というそういうことを言いたいのではないかと言う気はします。しかし、信仰の表出と学問とは全く別の話ですから、せっかくの『涅槃經の研究』を置いてきぼりにして、「大乘仏教は釈迦の教えからひとりでに生まれたのだ」、なんておかしいことを言ってもらっては困ります。大乘仏教は間違ひなく、それまでの阿含經とは違う教えをいろんな人が考えて作った、新たな仏教運動です。阿含の中で「阿羅漢になりましょう」って言っていた仏教が、「阿羅漢ではなくて仏陀になりましょう」と、全く違うことを言い出して、しかもそのための具体的方策を説き始めるわけですから、そこには新たな運動の起点というものが必ずあります。それを我々は探っていかなくてはいけない。

下田さんの説をそのまま受け入れてしまうと、もうこの分野に関しては勉強しなくてもいいよっていうことになってしまふんですね。これが私は一番怖いんです。学者本人が何を言っても、それは単に正しいか間違っているかだけの問題ですから構わないのですが、やはり下には学生さんもいますし、その薫陶を受ける人もいますから、そういう人たちが、もう大乘の起源なんていうのは探る必要はないんだ、先生がしなくてもいいって言っているんだ、というようなことになる、これは日本の仏教学界の大変な損失になると思います。

それで敢えて、下田さんも私の大親友なんですけれども、やはり言わざるをえないということで、先だって「印仏研」で言いましたし、雑誌には原稿用紙二〇枚くらいしか書けないので、添付資料として、その時、原稿用紙で九〇枚分の批判論文を付けました。お持ちの方もおられるかもしれませんが。おられないかもしれません。お持ちでない方はどうぞお申し出ください。無料で差し上げますから。下田さんに関してはこれで終わります。

それから3番目として、自己の信仰や宗門護持のための宗学的な仏教学が勢いを増している所に大きな問題があると感じています。綿密な調査をしたうえでの発言ではなく、あくまで私の感想ですが、非常に厳密な仏教学者であり、学問的には言うことなしという方が、最後の最後には、その研究の結論を無条件な自己の信仰の根拠にしてしまうという状況が増えてきているように思います。客観的学問と、情緒的信仰の無批判な結合です。非常に綿密な学問研究と、その中に僅か一要素だけ入っている自己の信仰による無条件の承認事項が組み合わさると、深刻な問題が起きると思っております。読者が、その学者のすぐれた学問体系の魅力に惑わされて、そのわずか一点の不合理的に気が付かずに、それを無批判に受け入れてしまうということです。これは、日本の仏教学に深い傷を残すのではないかと心配しています。

もう時間がありませんから、研究を志す人達へ、最後に一つだけアドバイスしましょう。「真理への道は細部に宿る」ということです。大きな成果は大まかな研究からは生まれません。大きな体系を作り出す第一歩はマイクロなレベルでの資料の解説、あるいは非常に小さな矛盾点への気付きからしか絶対に生まれない、ということを上記させていただきます。これは、私の仏教学者としての体験ではなくて、もうやめてしまいましたが、昔やった科学研究から得た私の実感でありまして、世の中の様々な物理、数学、化学、いろんな学問体系の展開、歴史を見ていきますと、どんな場合でも、大きな問題の最初の第一歩は、誰もが無視してしまうような小さなところから始まるんですね。

例えば、ご存知の相対性理論がなぜ生まれたかということですが、相対性理論が生まれた一番最初のきっかけは、光の速さを測るという実験ですね。マイケルソン、モーレーという二人の技術者が実験をしたのですが、縦方向に光を測った場合と横方向に光を測った場合とではニュートンの考え方によるならば、間違いなくスピードが違ってくるはずだということで、マイケルソンとモーレーは、ものすごく緻密な鏡を使った、これ以上ないくらい精密な機械を作って、それで光のスピードを測るんですが、何度測っても縦方向と横方向の光の速さがまったく同じになってしま

う。他の学者は、それは誤差だろう、つまり機械がまだ不十分だからなんだ、そんな小さなことぐらいいいじゃないか、そんなことゴチャゴチャやっているよりも先に進みましょうと言っていた中で、アインシュタインは、その機械は絶対に誤差がでないということが大事なんだ、その一点が大事だからそこから全部やり直してみよう、と考えました。ニュートンによれば違ってくるはずの光のスピードが違わないのだから、おおもとに戻って、光のスピードはどんな場合も同じだ、というふうに考えてみたらどうかということでは体系を作りなおしてみたら自然に相対性理論が出来てきたわけです。他の人はみんな無視していた実験の数値を真剣にとらえて考えたからこそ、大法則へと道が開けたのです。だから、ほんの僅かな、数字一個の違いでそれがパラダイムを変えていくというのは、実際にあることなんです。

私は同じことが仏教学にも当てはまると思いますので、ですからここに若い方もおられますが、今みなさんが目の前で毎日読んでいるようなテキストのわずか一つの言葉の違い、aでもbでもなんでもいいです。そういう単語の一つの違いが、実はこれからの大きな仏教学の展開の第一歩になる、それからしか展開はしないんだということを承知しておいていただきたいと思います。大雑把に考える思考からは大雑把な体系しか出て来ません。大雑把に考えて、それが緻密な体系につながることは絶対にないのですから、そういう意味で真理への道は細部に宿る、とかっこいいことをいいましたが、そんなふうにやっていたかだと思います。時間がきました。これで終わります。ありがとうございました。

(二〇一三年二月六日 仏教学会公開講演)